



ISM研究会のお知らせ

File Edit Data

Help



日時

07月09日

14時30分

場所

立教大学 5号館

院生控室 教室

テキスト/テーマ

『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』

編者/著者

マルクス

出版社

大月書店(国民文庫32)

範囲

[1]~[4]



前半期 第5回/通算 第73回

ご案内-詳細

理論的には、特に資本主義の下での国家の役割(国家の相対的自立性なるもの)との関連で、このテキストは利用されてきました。また、これと関連して、ボナパルティズムが現代にとってどのような意義を持っているのかということが論じられてきました。それらの議論の良し悪しは別にして、マルクス主義の国家論なるものをやっている人たちと議論する際に、この本は基本的な教養をなしています。

報告者

人名	割当
窪西 保人	[1],[2]
今井 祐之	[3],[4]

出欠

- 出席
- 欠席

OK

Cancel

Replace

前回の研究会の時に、次に何をやるのか、いろいろな議論が出た末に、結局、“前半期と後半期とに分かれてもいいから、『ブリュメール18日』をやろう”ということになりました。

ご存じの方が多いでしょうが、一応、このテキストの性格について書いておきます。——自由・平等・博愛を理念にしたフランス革命は、ブルボン王朝を打ち倒しました(第一共和制)が、血を血で洗う専制に帰着し、結局のところ、その中からナポレオン一世の帝政が生まれました(第一帝政)。ナポレオンの敗北後は王政が行われたのですが、1948年になると、偉大な2月革命が起り、再び王政が否定されます(第二共和制)。ここで、労働が市民の権利であるということを承認する労働権の宣言、労働問題を国家介入によって調整しようとするリュクサンブール委員会の設置、国家管理によって生産を行うアトリエナショナルの創設、十時間労働日の政令、言論・出版・集会・結社の自由の一般的承認などが行われ、遂には史上初めて成人男性の普通選挙権が認められました。この衝撃は、ヨーロッパ中を震撼させました。

と、まあ、こんなことが長続きするわけもなく、社会主義共和派の敗北を通して、結局のところ、ナポレオンの甥っ子であるルイボナパルト(ナポレオン三世)が政権を握り、遂には共和制そのものが解体されるわけです(第二帝政)。——この間の事情を書いたのが、この『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』です。

理論的には、特に資本主義の下での国家の役割(国家の相対的自立性なるもの)との関連で、このテキストは利用されてきました。また、これと関連して、ボナパルティズムが現代にとってどのような意義を持っているのかということが論じられてきました。それらの議論の良し悪しは別にして、マルクス主義の国家論なるものをやっている人たちと議論する際に、この本は基本的な教養をなしています。

当たり前ですが、このテキストには、当時の細かい歴史的事実が書かれているために、なかなか理解するのが厄介です。それに加えて、独り善がりな文体が読者の理解を困難にさせます。マルクスには文学的に表現する能力が全くなかったのですが、困ったことに、彼自身は自分に文才があると考えていたようです。このような困難は何人かで一緒に読めば、少しは軽減されるはずです。

とは言っても、あまり細かい歴史的な事実にこだわることなく、現在の社会状況との関連で、現代的な問題意識で、理論的に読んでいきたいと思います。

なお、テキストは品切れかもしれませんが(大学図書館などには必ずあるでしょう)。テキストを入手することができない方は、至急、今井のところまでご連絡ください。できるだけ早急にコピーをお送りいたします(コピー代、郵送料はご本人の負担といたします)。

今後の予定は、――

07月23日(日曜日)

です。予定を立てる際の参考にしてください。



今後に取り挙げてほしい――あるいは取り挙げるべき――テキストあるいはテーマがありましたら、お教えください。

